

事務局資料

(第2回会合における議論のポイント)

2026年5月20日

情報通信政策研究所調査研究部

- 前回会合において、野田構成員から「α世代のメディアリアリティ」と題する御発表をいただき、それに対する質疑及び意見交換を実施した。
- 御発表及び意見交換を通じて得られた示唆について、事務局において以下のように整理を行った。

◆ 野田構成員からの御発表及び意見交換から得られた示唆 ※発表内容及び質疑を通じての発表者における見解を中心に整理したもの

- 2010年以降に生まれたα世代は、幼少期からデジタルに触れている真のデジタルネイティブ。遊びながら直観で身に付けるクリエイティビティを有し、フィジカルに軸足を置きながらもオンラインが遊び場となり、双方向が基本である。
- Z世代は、SNSを中心に個性を表現し認められることに喜びを感じるのに対し、α世代は、みんなと共創し楽しさを広げることに喜びを感じている点に違いがある。
- α世代は、好奇心さえあれば、AIの答えに頼り切るのではなく、自ら物事を理解し自分自身を鍛えることができることから、本当の興味を育てることが重要。
- 1990年代のインターネット普及時の状況との比較では、AI・SNS普及により自由な発想で直感的に創作ができる手段が整っていること、教育において利用に伴う危険やルールが教えられている点で異なっている。
- テクノロジーの影の部分への対処について、単に子どものSNS利用を禁止するのではなく、プラットフォームや広告側の自律規制により大人が危険でない社会をつくっていくこと、親や教育者がリアルのみならずオンライン世界も考慮してコミュニケーションを取ることでできる関係を構築することが大事である。
- このほか、質疑において経済格差や地域格差の問題についての指摘があった。

未来社会は人と人が自分の欲望・願いを誘発しながらフィジカルな世界をより充実させていく社会

- 前回会合において、井上智洋 駒澤大学経済学部准教授から「2050年の未来社会における仕事の在り方」と題する御発表をいただき、それに対する質疑及び意見交換を実施した。
- 御発表及び意見交換を通じて得られた示唆について、事務局において以下のように整理を行った。

◆ 井上様からの御発表及び意見交換から得られた示唆

※発表内容及び質疑を通じての発表者における見解を中心に整理したもの

- 平均的な労働者がパソコンを使ってできる作業のほとんどをこなせるAIが数年先には実現し、ホワイトカラーの仕事はAIに取って代わられるようになる。人間の役割は、AIでアイデアを形にするディレクションに集約されていく。
- スキルや知識は労働市場で価値を持たなくなる一方、自らのやりたい方向を理解して上手くディレクションするためにはスキルや知識が必要。ディレクションができるように教育をしていくことや、泥臭い体験もクリエイティビティを発揮するために重要である。
- AI・ロボットは人間のような身体を持たず、人間らしい意思や体験がなく、価値判断ができない。人間の仕事は完全には消滅せず、最初の問いを発するのは人間である。
- 2050年頃に向けては、汎用AIの出現により、爆発的な経済成長が期待される一方（純粹機械化経済）、ほとんど仕事を得られない人が増えていくことで、超格差社会になっていく。汎用ロボットがブルーカラー失業を招き、これまでの産業革命で起きたような労働移転が起こらず、労働市場のミスマッチが深刻化する。
- 人々の生活を支えるためにベーシックインカムのような新しい制度が必要。未来社会は、物質的には豊かになるが、精神的に豊かな社会になれるかは議論が必要。

未来社会とは雇用は少ないが豊かな社会

- 前回会合において、金井良太 株式会社アラヤ代表取締役から「ニューロテクノロジーと人類の未来」と題する御発表をいただき、それに対する質疑及び意見交換を実施した。
- 御発表及び意見交換を通じて得られた示唆について、事務局において以下のように整理を行った。

◆ 金井様からの御発表及び意見交換から得られた示唆

※発表内容及び質疑を通じての発表者における見解を中心に整理したもの

- 人間には脳や身体という生物的制約があり、ブレイン・マシン・インターフェース (BMI) は、脳と機械が融合することにより制約を解放する技術として期待される。従来、脳波から解読できる情報は限定的であったが、データを大量に集めてAIに学習させることで、活用の場面を広げつつある。
- BMIは、次の10年で認知と記憶に関する市場が広がり、記憶を保存して刺激によって自由に思い出したり、他者との記憶の共有が可能になると考えられる。健常者も利用し、新しい記憶を介したネットワーク社会が誕生する。
- 今後は体とAIの境界がなくなっていくと考えられる。AGIまで進まなくても、LLMやVLMが脳と繋がり、人間がAIと同じぐらい賢くなり、AIに対峙して共存していく可能性も考えられる。
- 能力や自我を拡張する技術に対する考え方について、欧米だと病気で困っている人を助ける使い方は認められるが、一般の人に対しては人権意識が強いということもあり非常に慎重。日本の方が技術を受け入れて、試していく傾向にある。
- ニューロテクノロジーは様々な分野を横断することから、関係機関が連携し、日本が主導権を握っていくことが重要。

AIは知能の外部化だった、次に来るのは知能の内蔵化である

- 前回会合において、持丸正明 産業技術総合研究所フェローから「人間拡張から俯瞰する未来社会の光と影」と題する御発表をいただき、それに対する質疑及び意見交換を実施した。
- 御発表及び意見交換を通じて得られた示唆について、事務局において以下のように整理を行った。

◆ 持丸様からの御発表及び意見交換から得られた示唆

※発表内容及び質疑を通じての発表者における見解を中心に整理したもの

- 人間拡張は、身体、感覚、心理、コミュニケーションといった人間の機能を拡張し、人類又は個人にできないことを、行為主体感を持って可能とする技術である。
- 人間拡張は、AI・ロボットによる完全自動化が実現するまでの移行期間の技術ではなく、自分でやりたい領域（共働領域）において人間を支援し、社会のWell-beingを高めていく。
- 人類は、急速な技術・社会・環境の変化に遺伝子が対応できない部分をテクノロジーでカバーし、アップグレードを図って持続可能な未来社会を構築していく。
- 社会的生物である人間は、物理的なコミュニティへの帰属と貢献が必要であるが、徹底した生産性・効率性の追求や仮想化がコミュニティ形成に役立っていた余白をつぶしてしまう可能性がある。物理的コミュニティの負の側面をうまく解消しつつ、効率よくエンハンスしていく必要がある。
- 社会性を高めるということがコミュニケーションの拡張であるならば、仮想空間だけでなく物理空間でも技術開発はできると思うが、今そのような技術開発の意義について社会的・学術的な合意はなされていないと思っている。
- 人間拡張の今後において二極化をもたらす要因について、①新しい生産活動に求められる能力を早期に獲得できる人とそうでない人がいること、②先行者優位という仕組みやルールの2つが考えられる。後者については、何らかのルールにより対処していくことが考えられる。

未来社会は人間拡張技術が民主化してコミュニティ・サービスが向上するが、経済・能力格差が広がる社会